

上総国府はいずこ？

2020 年 9 月 7 日改訂 3

我部山 民樹

1. 奈良・平安時代の主な出来事

奈良時代	日本	上総国
645	大化の改新	
701		上総国ができる
710	平城京に遷都	
740		上総国府の政庁の整備に着手？
741	聖武天皇が国分寺建立を命じる	
742	国ぐにで国分寺の僧と尼を選ぶ	国分寺と国分尼寺建設に着手？
743	大仏建立を命じる	
747		本格的な建設に着手？
752	奈良東大寺の大仏ができる	
753		上総国分寺・国分尼寺が完成？
756	聖武天皇がなくなる	
764	藤原仲麻呂の乱、道鏡が権力を	道鏡の弟、僧弓削浄人がふるう 上総守になる（親王扱いか？）
平安時代		
794	平安京に遷都	
848		上総国分寺火災？
889		桓武天皇のひ孫である高望王（た かもちおう）、姓が平（たいら） となり上総介になる
939	平の将門の乱	上総国も将門に支配される
1008	菅原孝標の娘誕生	
1017		菅原孝標の娘、父の任地上総に 来る
1020		孝標の娘、一家で上総から京に むかう
1028	平の忠常の乱（～1031）	上総国荒廃する
1060	孝標の娘「更級日記」を書き 始める	
1185	源頼朝による政治が整い始める	このころ国分寺が再び整えられ る？（現存している）

2. 国府について

① 国府

奈良・平安時代に律令国の国司が政務をとる施設（国庁）が置かれた都市。国府付近には国府政庁の外に国分僧寺（国分寺）、国分尼寺、惣社が設置され政治的中心都市であるとともに司法・軍事・宗教の中心部であった。大きさはおよそ 600m～900m 四方の規模である。

山口県の周防国府の 870m 四方である。茨城県の高萩城の陸奥国府の外城は約 1,000m 四方である。

7 世後半から 8 世紀の初めにかけて、国府はまだ完全な形に整っていない、長い年月をかけて完全な形になっていった。

② 国府政庁（国庁）

行政機関で推定 100m～200m 四方の建物で国府の真ん中で、やや北に位置する。

山口県の周防国府は推定 200m 四方であった。

茨城県の高萩城陸奥国府の外城は約 1,000m 四方で、内城は東西 100m、南北 120m の囲いの中に正殿・前殿と東西脇殿で囲まれた中庭があった。



下野国府政庁の模型

③ 国司

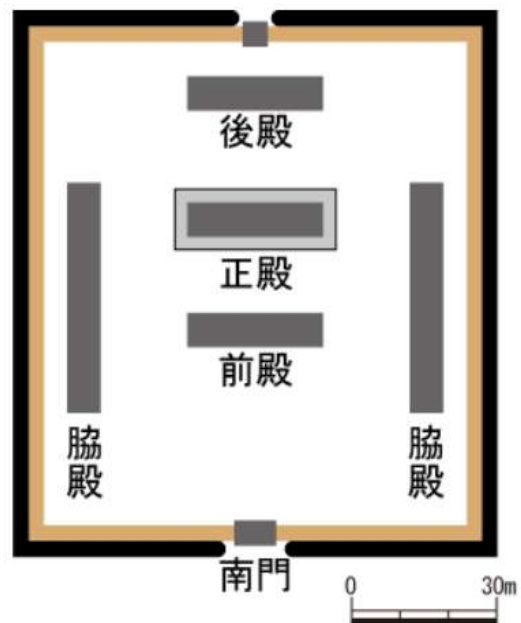
律令制で、中央から派遣され諸国の政務をつかさどった地方官。その役所を国衙（こくが）といい、守（かみ）・介（すけ）・大掾（だいじょう）・少掾（しょうじょう）・大目（だいさかん）・他の役人がいて併せて 500 人を超える人々が働いていた。

国司が国分寺建設の責任者だった。

④ 国分僧寺・国分尼寺

どの国でも国庁からさほど遠くないところに建立された。

国分僧寺と国分尼寺は国府から見て同じ方向に、2 km 以内（発見例）の場合



讃岐国府政庁の構造

所に建立された。（上総国の国分僧寺と国分尼寺は発掘他により位置が確認されている。）



出雲国府政庁、出雲国分寺、出雲国分尼寺

⑤ 総社（惣社）

国府にくっついている神社で、平安時代から、国府政庁の近くに置かれたと考えられている。常陸国では国府の跡地が発見されているが、そのすぐ南に今でも惣社（総社）が残っている。また国府があった場所に総社の地名（岡山県、大阪府等）が残されている。上総国にも国分寺周辺に惣社の地名がある。

⑥ 国司館（こくしやかた）

国司の住まい、官舎。守の館、介の館が用意された。国分僧寺の近くで、国府政庁に容易に通えるところにある。



陸奥国司館の復元図

⑦ 国府への道

京の都と国府の間は東海道とか東山道とかの主要幹線道路で結ばれてい

た。幹線道路から枝分かれして国府への道がつくられていた。(出雲国風土記などによる)

⑧ 国府への水路

全国的に見て、古代の国府は大きな川の近くにあって、その川の流れがつくった平野に置かれた例が多い。

主要幹線道路と水路交通の利便性の良いところに置かれた。

2. 上総国府に関する資料

上総国府は親王しか国守になれない「親王任国」で、他には常陸、上野だけである。道鏡の弟は例外である。

930 年頃の「倭名類聚鈔」(わみょうるいじゅうしょう) には上総国府は「市原郡にある」と書かれている。

市原群は当時の村田川と養老川の間である。

(1) 国府候補地

① 村上地区 ② 郡本地区 ③ 能満地区 ④ 市原地区





古道 1(メインルート)を古代東海道と称す

古道 2 を古代道と称す

奈良・平安時代の市原と上総国府候補地



候補地	訪問
市原地区 ・阿須羽神社は国庁近くの庭にあった国府の守り神だった？穀物の神様がまつてあり、国府に無くてはならない神社との説。 ・光善寺に薬師堂があり、更級日記に書かれている薬師様？国分寺より古い瓦が出土している。国府にまつわる寺の可能性もあるが、そうとも言い切れない 国府（こう）の前にある寺→光善寺と名づけた？（うがち過ぎ？） ・秋祭りの柳楯（やなぎだて）神事（※１）は、その昔、国府から飯香岡八幡宮へお客さま（※２）を連れて運んだ行事の名残？そのルートは古代道である	2019, 6、25 周辺に平坦で広大な土地は見当たらなかった？ 総社的役割か？
郡本地区 ・古甲（ふるこう）遺跡から平安時代はじめごろのものと思われる大きな溝の跡が見つかる。国庁の区域か？ また、相当大きな建物があつたと考えられる柱の跡が見つかった。掘立て柱の跡か？ ・中世の頃まで国府のことを「こう」とよんだので、古い国府→古甲に変わった。国府があつた名残？ ・郡本八幡宮にあつたという室町時代に作られた銅盤の懸仏（かけぼとけ）には「上総国府長官の代理人」の名があつた ・郡本八幡神社の南側に明治時代の初め頃まで、国府を守る神様（守公神）を祀った神社にかかわる名前を持った大きな寺、守公山揚柳寺神主院があつた。 ・国府に使われていた基壇に使われていたと思われる石板が残っている。国府以外に中世では神社にも使用されている例がある。これだけでは判断できない（しかし、この地区に基壇を使用した大きな神社があつたと言う記録は無いが？）	
村上地区	

- ・養老川北岸の村上川堀遺跡には国府にかかわった人達が使ったかも知れない土器や帯の飾りも出た。
- ・この低地に国府があったが、9 世紀後半に暴れ川の養老川が氾濫し壊れたので、安全な台地上に移転したという説がある。氾濫の時期を示す遺構が発掘されている。
- ・奈良時代につくられた古代東海道の近くにあって、国府を構えるのに絶好の低地だったとする説がある
- ・全国的に国府は大きな川によってつくられた平地上に置かれていることが多い。

※1；柳楯神事（やなぎだてしんじ）

柳の枝と青竹を縄でゆわえて作った特別の楯をかついで、民家からスタート神社の氏子の司家とよばれる 2 件の家が交代で柳楯をつくる。それを光善寺（750 年頃建設の国分寺より古い）→市原八幡神社（飯香岡八幡宮の元宮と言われ、惣社の役割をしていたが、それが飯香岡に移ったという説もある）→阿須羽神社（‘あすは’、755 年の万葉集に名前が出て来る。道中の神）→五所小学校の校門→五所町民館（一泊）

五所橋→飯香岡八幡宮（‘いいがおか’、625 年建立、奈良時代には国府八幡宮、平安時代には国府総社八幡宮とか呼ばれた）に運ぶ。神事の起源は千年以上前と伝承されている。

※2；お客様

柳楯の客人は仮説だが、国府の中心にある国庁をお守りする神様だったのかもしれない？国府を動かしていた人物だった？





飯香岡八幡宮(国府神社)



阿須羽神社と万葉歌碑



光善寺



光善寺薬師堂



国庁推定地

探検は国庁の守り神**阿須波神社**からスタートし、**光善寺薬師堂**を参拝する。このあたりは蘇我氏の勢力範囲だったらしく、この寺も蘇我上総太郎光善の創建と伝えられている。

この寺に南面する民家の新築現場から、古代の土器や瓦が出土した。いわゆる**市原遺跡**で、上総国庁跡の有力候補地とされている。

村上地区より戸隠神社を望む

4の村上地区は荒老川の沿岸の低地で、すぐ近くの高台には、国分寺や国分尼寺の遺構があり、惣社という地名が広い範囲に残っている。藤岡謙二郎や木下良など国府研究の大御所は、上総国府を村上地区に比定している。実際、**村上川堤遺跡**からは、国司が腰帯に付けていたと思われる、丸韮(まるとも)と呼ばれる帯飾りが出土している。しかし、まだ決定的な証拠は出土していない。



戸隠神社(上総国総社)

こちらを総社に比定する説もある。なにしろ惣社という地名の真ん中にあるのだから。地名は良く古代の歴史を物語るといわれる。周囲には国分寺の遺跡も多く、**戸隠神社**が上総総社であった有力な証拠になっている。

かなりの高台で更級日記に書かれたように、眺めは良かったろうと思われる。



戸隠神社拝殿

郡本遺跡群



海岸平野に面する市原台地上、大字郡本一帯に分布する遺跡群の総称です。郡本八幡神社周辺は市原郡家の比定地とされ、神社参道付近には大型掘立柱建物の礎石とされる石が安置してあります。これに対し北東の国道297号線付近では、「古甲（ふるこう）」「古光」などの小字から上総国府推定地の一つとされています（こう＝国府?）。千葉県文化財センターと市原市文化財センターが部分的な発掘調査を実施し、奈良時代以降の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などを確認しています。現状では郡衙・国衙などを直接捕捉したとは言えない状況ですが、何らかの重要施設が含まれることは確実です。出土遺物は古代から中世まで認められるので、古代末期から中世前期にわたる国衙機構の変遷が知れる可能性もあります。今後、詳細な検討が期待される遺跡です。

4. 国府候補地の推定

(1) 国府所在地推定に際して

- ・国府の所在を確定するには今後の発掘を待つしかないが、各所に痕跡があるのは時代の変遷他の理由によりそれぞれの場所に移転していったと考えると分かり易い。他の国でも移転した例がある。

- ・最初は村上地区にあった

平安時代、牛車は貴族の一般的な乗り物であり、運搬にも使用されたが、奈良時代は水路が交通の主流だったのではないかと考えられる。人や荷物の運搬に便利な養老川に近く、且つ古代道に近いので交通の利便性ははるかに良い場所だった。低地で軟弱な土地だったろうし、整地に時間を要したと思われる。

9世紀後半、暴れ川の養老川の氾濫により壊滅したので、高台の市原・郡本地区に移転した。

②能満地区

国府の伝承が多いが、発掘物が少ない。1513年～1868年の古文書に府中積蔵院の名が伝承されている。それ以前の伝承が記録に残っていないのが気になるが、本格的な国府が出来るまでのある期間、地方豪族による国衙的なものがあつたのかもしれない？村上地区の本格的な国府が750年頃？に完成するまでのある期間、比較的質素な国衙（地方豪族が国守の役割をしていた）があつたか？しかし、全国的に府中という名は中世以降につけられた例が多いので、中世になって国衙的な施設が出来て、府中の名が残ったのかもしれない。

(2) 国府の推定地

村上地区から郡本・市原地区に移転した。

- ①村上地区 8世紀中頃から9世紀後半まで

- ・養老川に近く、古代東海道にも近くて、交通の便が良い。奈良時代、移動・運搬は水路が主流だったと思われる。川によってつくられた平地上に国府が建立された例が全国的に多い。平地が広くないので比較的小規模だった？
- ・惣社という地名が残っていて、そこに戸隠神社がある。元は惣社だったという説もある。村上に国府があったとすれば、国分寺僧寺との間になる。
- ・発掘物が多い。国司が腰帯に付けていたと思われる、丸鞆（まるとも）と呼ばれる帯飾りが出土している。しかし、決定的な証拠は出土していない。

②市原・郡本地区 9世紀後半から

市原と郡本地区一体で国府が置かれたと推定する。平安時代になり、村上地区より大規模な国府が置かれたと思われる。

- ・養老川の氾濫により低地の村上にある国府が壊滅したので、高台に移転した。村上に比して高台にあり、水害に対して安全な場所である。
- ・発掘物が多い。神社参道付近には大型掘立建物の礎石とされる石が安置されている。付近では古甲（ふるこう）などの小字から候補地の一つとされている。古甲は「古いこう（＝国府）」が由来だとも言われている。
- ・牛車が発達し、この時代には移動・運搬は必ずしも水路に依存しなくてもよくなった。
- ・古代道沿いにある。

(3) 国司館の所在地

発掘されていないが、いずれの時代も国司館は水害に強い高台にあるはずで、国分僧寺のすぐ北西に置かれた時期もある？

国分僧寺の北西すぐに位置する台遺跡から国司の位（くらい）「大目（だいさかん）」と書かれた土器が発掘されている。

5. 「更級日記」にある門出の仮住まい「いまたち」の場所の推定

やしゃご かずさのくに ずりょう

菅原孝標女は1008年、菅原道真の玄孫で上総国（現在の千葉県）の受領（現在でいう知事のようなもの）を務めていた父親と藤原家の血を引く母親のもとに生まれます。一族には学者が多くいたほか、なんと伯母は『蜻蛉日記』の作者、藤原道綱母。彼女が学問や文芸の道に秀でたサラブレッドであったことは言うまでもありません。

国司孝標は任務を終えて陸路を牛車で3か月ほどかけて上京（帰国）した。菅原孝標の娘による「更級日記」に、孝標の一行が門出して「いまたち」に仮住まいして、日記にそこから見た景色の描写がある。

南は、はるかに野の方見やらる。ひむがし西は、海近くていとおもしろし。
夕霧たちわたりていみじうをかしければ、朝寝などもせず、かたがた見つ、
ここをたちなむこともあわれに悲しきに.....

まずは国司館から古台道を北上するルート上に位置すると思われる。周辺を見渡せる高台にあって、南をはるかに見渡すことが出来て、東と西（実際は北東と南西）に海が見える「いまたち」の候補の場所は

① 諏訪台

国分寺近くの諏訪台古墳は高台にあり、景色の描写に合致している。南方をはるかに見渡すことが出来る。古墳周辺は仮住まいの建屋に十分な広さがある。

② 戸隠神社

高台にあり、景色の描写に合致しているが、周辺に仮住まいを建てるほどの広さが神社の境内にも周辺にも見当たらない？

③ 飯香岡八幡宮の周辺

景色の描写に合致し、海に近いが、周辺に南の野をはるかに見渡せるような高台が見当たらない？

何れにしても「いまたち」も特定できないし、特定できたとしても国府所在地のヒントにはならないだろう。

ここ数年遊びなれた家を、丸見えになるほど乱雑に壊して、大騒ぎをし、日がちょうど沈むときで、とても物寂しく霧が一面にたちこめているときに、牛車に乗るということで（家の方に）目を向けたところ、人目のないときに何度もお参りしては、額をついてお祈りしていた薬師仏が（残されて）立っというのを、お見捨て申し上げることが悲しくて、人知れず自然と泣けてくるのであった。

更級日記は作者が上総から京に帰国しておよそ 40 年後の回顧録であって、その都度メモしていなかったとしても（ある程度メモしていたかも知れない。）、12 歳位の時の景色の記憶は信頼出来るのではなかろうか。

‘更級日記に国司館や国司政庁の位置を示すヒントを記述してくれていたら’と、とても残念に思う。

しかし国司館で源氏物語の話を聞いただけでは熱が覚めず‘京に帰って源氏物語を早く読みたい’と薬師仏に一心に祈っていた「源氏物語オタク」の少女にとって父親の政務場所なんかに興味は無かったかも知れないので無理な期待でしょう。

参考文献；たからしげる氏「まぼろしの上総国」

以上